現代の国語・言語文化

第1問 次の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

少し残酷な感じがしますが、多くの生き物は、食われるか、食えなくなつて餓死します。これをずっと自然のこととして繰り返しており、なんの問題もありませんでした。つまりざっくり言うと、個々の生物は死んではいますが、たとえ食べられて死んだ場合でも、^ア自分が食べられることで捕食者の命を長らえさせ、生き物全体としては、地球上で繁栄してきました。

寿命で死ぬ場合も基本的には同じで、子孫を残していれば自分の分身が生きていることになり、やはり「命の総量」はあまり変わっていません。食う、食われる、そして世代交代による生と死の繰り返しは、生物の多様化を促し、生物界のロバストネス（頑強性、安定性）を増しています。つまり生き物にとつての「死」は、子供を産むことと同じくらい自然な、しかも **A** 的なものなのです。

事実、自身の命と引き換えに子孫を残す生き物、例えばサケは産卵とともに死に、死骸は他の生き物の餌となり、巡り巡って稚魚の餌となります。もっと **B** 的な例ではクモの一種である (注1) ムレイワガネグモの母グモは、生きているときに自らの内臓を吐き出し、生まれたばかりの子に与え、それがなくなると自らの体そのものを餌として与えます。まさに、「死」と引き換えに「生」が存在しているのです。

一方、^イヒトの場合は少し複雑です。死に対する恐れは非常に強く、特に身内の死には大変なショックを受けます。私事で恐縮ですが、私の母は、夫（つまり私の父）が突然心不全で亡くなったときに、あまりのショックで「自分が違う世

界にきてしまったように、全てのものが以前とは違って感じられる」と言っていました。配偶者や近親者の死は、間違いなくヒトが受ける最大級のストレスです。

このように、死に対してショックを受けるのは、言うまでもなく、ヒトが強い感情を持つ生き物であるためです。喜んだり悲しんだりもそうですが、特に相手に同情したり共感したりする感情は、霊長類や大型哺乳類、鳥の一部にも見られますが、ヒトのそれは他の生き物より抜きん出て強いのです。

この同情・共感する感情は「優しさ」と言ってもいいのかもしれませんが。死を怖がる気持ちは、自分が死んだら周りの人が悲しむだろうな、苦勞するだろうなという想像からもきています。この同情心（人に対する優しさ）、徳（全体に対する優しさ）などの人間らしい感情・行動は、やはり変化と選択の進化の過程で獲得したものです。つまり、自分だけが生き残ればいいという **C** 的な能力よりも、集団や全体を考える能力のほうが重要であり、選択されてきたのです。そこから来る死に対する悲しみや恐れは、もつとも人間らしい感情と言ってもいいかもしれませんが。

生物の多様性と死について整理しておきましょう。生き物が死ななければいけないのは、主に二つの理由が考えられます。その一つは、すぐに思いつくことです。食料や生活空間などの不足です。天敵が少ない、つまり「食われない」環境で生きている生物でも、逆に数が増えすぎて「食えなくなる」ことはあるでしょう。この場合、絶滅するくらいの勢いで個体数の減少が起こり、その後、周期的に増えたり減ったりを繰り返すか、あるいは少子化が進み、個体数としては少ない状態で安定し、やがてバランスが取れていきます。

少し脱線しますが、この生物学をヒトに当てはめてみます。例えば現在の日本人は、食料や生活空間の不足はほとんどないので、保育所や教育環境、親の労働環境など、いくつかの子育てに必要な要素が不足しています。それにより、子供を作れなくなる少子化圧力が強まり、出生数は減り続けています。死亡率が上がるのも、出生率が下がるのも、

X

この減少が、日本人の絶滅的な減少に繋がるか、あるいは出生数が低い状態で安定するのは、今後 **ウ** これらの少子化

圧力要因がどのくらい改善されるかにかかっています。不足は衣食住の物質面だけでなく、精神面においてもあります。子供を作りたくなくなるといふ将来の不安要素は、当たり前ですが確実に少子化を誘導します。私は、何も対策を取らなければ、残念ですが日本などの先進国の人口減少が引き金となり、人類は今から百年ももたないと思っています。非常に近い将来、絶滅的な危機を迎える可能性はあると思います。未来への投資は簡単ではありませんが、手遅れにならないうちに真剣に取り組むべきです。

さて、話を元に戻します。生き物が死ななければいけないもう一つの理由は、「多様性」のためです。こちらのほうが、生物学的には大きな理由です。

というのは、先に述べた「食料や生活空間の不足」は結果論で、しかも限られた空間で生活している生き物の話であつて、一般的な「死ななければならぬ理由」ではありません。不足が生じた場合、どこか新しい場所に移動したり、新しく食べられるものを探し出したりすればいいのです。本当の死ななければならぬ理由は、これよりも、もっと根本的なことです。

生物は、激しく変化する環境の中で存在し続けられる「もの」として、誕生し進化してきました。その生き残りの仕組みは、「変化と選択」です。変化は文字通り、変わりやすいこと、つまり多様性を確保するように、プログラムされた「もの」であることです。その性質のおかげで、現在の私たちも含めた多種多様な生き物にたどり着いたわけです。

具体的には遺伝情報（ゲノム）が激しく変化し、多様な「試作品」を作る戦略です。変わりゆく環境下で生きられる個体や種が必ずいて、それらのおかげで「生命の連続性」が途絶えることなく繋がってきたのです。

そのたたくさんの「試作品を作る」ためにもっとも重要となるのは、材料の確保と多様性を生み出す仕組みです。材料の確保については手っ取り早いのは、古いタイプを壊してその材料を再利用することです。つまり、「^{注2} ターンオーバー」です。ここにも「死」の理由があります。

（小林武彦著『^{こばやしたけひこ}生物はなぜ死ぬのか』に基づく。ただし、出題に際し省略などの改変をしている。）

(注) 1 ムレイワガネグモ……アフリカに生息するクモのこと。

2 ターンオーバー……ものが入れ替わること。

問一 傍線部ア「自分が食べられることで捕食者の命を長らえさせ、生き物全体としては、地球上で繁栄してきました」とあるが、食う・食われるの関係は生物全体の繁栄にどのように寄与しているというのか。その説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ア。

- ① 捕食者が食べられることで、その命が絶え、生態系のバランスが崩れる。
- ② 捕食者が他の生物を食べることで、捕食者自身が生き残り、結果的に生き物全体が繁栄する。
- ③ 捕食者が他の生物を食べることで、被食者の個体数が増え、結果的に生態系全体が繁栄する。
- ④ 捕食者が生き残るために他の生物を食べることで、結果的に食物連鎖が崩壊する。

問二 空欄 A ～ C に入る言葉として最も適切なものを、次の①～⑦の中からそれぞれ一つ選べ。ただし、同じものを繰り返し使用してはならない。解答欄は、A イ・B ウ・C エ。

- ① 直接
- ② 総合
- ③ 必然
- ④ 利己
- ⑤ 間接
- ⑥ 弾力
- ⑦ 周期

問三 傍線部イ「ヒトの場合は少し複雑です」とあるが、他の生物と比べてヒトの場合はなぜ複雑なのか。その理由として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、。

- ① ヒトは社会的動物であり、身内や仲間の死が社会構造や個人の安定に深刻な影響を与えるから。
- ② 進化の過程で、ヒトは他者への同情や共感力を育んできたため、死に対する感情も強くなったから。
- ③ ヒトは強い感情を持つ生き物であるため、自制心が弱く、生きることへの執着が強くなったから。
- ④ 文化や宗教など、ヒトが死と向き合う文化的な背景が、死に対する感情を形成する一因となっているから。

問四 空欄 に入る文として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、。

- ① 生き物が死ぬという意味では同じです
- ② 少子化が進むという意味では同じです
- ③ 人口が減るという意味では同じです
- ④ 多様性が減るという意味では同じです

問五 傍線部ウ「これら」が指す内容は何か。その説明として不適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、キ。

- ① 保育所や教育環境の不足
- ② 親の労働環境の問題
- ③ 死亡率の急増に対する不安
- ④ 衣食住に関する物質的な不足

問六 本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ク。

- ① 生物は寿命が尽きるまで食べ続けることが一般的であり、食することで生物の多様性に寄与している。一方で、捕食者と被食者の関係は、生態系のバランスを保つうえで重要な役割を果たさない。
- ② 個体の死とそれに伴う世代交代は、生態系のバランスを崩す原因である。よって、環境の変化に対応するため、生命の連続性を断ち切ることが重要である。
- ③ 死は生物の多様性を促進し、生物界全体の頑強性を増す要因である。これにより、生態系が安定し、生命の連続性が保たれている。
- ④ ヒトは、進化とともに、自己中心的な能力をもっとも重要視してきた。これは、生物学的な進化の原理と完全に一致する面をヒトが持っていることを意味している。

第2問 次の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

中世人の頭のなかでは誰が自分より格上または格下であり、しかもどのくらい格上または格下であるのか、逆に対等に付き合ってよいのは誰と誰なのかといった計測が、実際のあるすべての人びとについておこなわれていた。それは自己―他者間だけでなく、他者―他者間の比量も含んでいたから、結果的に中世人は視界に入るすべての人びとを格付けし、序列化していたことになる。そして各人が官位の昇進や政治的な浮沈をくり返すなかで、この情報は日々更新されていたのである。

それをもっとも敏感に反映していたのが手紙の書き方であり、当時これを書札しよざつれいとよんだ。なかでも一二八五年（弘安八）十二月に（注1） 龜山かめやま院政下の朝廷で定められ、のちに「弘安礼節」などの名でよばれることになる礼法は、きわめて体系的で整備された内容をもち、貴族の間で権威ある規範として、その後長期にわたって影響力をもちつづけた。

ア「弘安礼節」は書札礼・路頭礼・院中礼の三部よりなる。路頭礼とは、路上で牛車ぎゅうしゃどうしが出会ったときの作法、院中礼とは、院御所で出会ったときの作法をそれぞれ定めたものである。「弘安礼節」の体系は、官職をベースにして、そこに位階と（注2） 殿上人てんじやうびと・（注3） 地下じげの別などを適宜加味してつくりあげられていたが、三部のなかでもっともよく参照されたのが書札礼であり、今日伝わる「弘安礼節」の写本にも書札礼だけを書写したものが少なくない。路頭礼と院中礼が貴族以外にはあまり縁のない礼節であったのにたいし、書札礼は手紙を書くすべての人びとが参照し、応用することの可能な高い汎用性を備えていたからである。

もちろん、実際の書札礼はつねに「弘安礼節」どおりにおこなわれたわけではない。官職だけではかならずしも測りきれない潜在的な身分差というものが、当時の社会にはいくつも存在したからである。たとえば「弘安礼節」の本則にしたがえば薄礼で済むはずの卑官であっても、相手が前途洋々たる（注4） 撰閥家の御曹司おんせうしともなれば話は別で、規定よりも一段厚礼の書札礼を用いるのが普通であった。室町將軍家のばあいも同様で、絶大な権力を握りながら官職面では頂点を極

めていないということも往々にしてあったから、このばあいも本則どおりというわけにはいかなかった。そのことは、じつは「弘安礼節」にもすでに織り込み済みであり、巻末に「おのおの家の勝劣を存じ、よろしく斟酌せしむべきものなり」との付則が設けられている。家の優劣などを考慮しながら柔軟に適用せよというわけだ。当時の人びとは、官位以外にも家柄や権勢など、さまざまな要素を勘案しながら用いるべき書札礼を決定していたのである。

このように熟慮に熟慮を重ねたすえに選ばれた書札礼であっても、結果的に相手に不快感を与えてしまうことはあった。それはまだ上等なほうで、未熟さや勘違いから単純な書札礼違反を犯してしまうことももちろんあっただろう。そうしたときに相手がどのような対応を示すかという点と、率直に抗議して手紙の書き直しを求めている例もみられるが、受け取らずに使者に持ち帰らせたり、受け取っても返事をしなかったりといった対応がとられていることも多い。私たち現代人にはかなり陰湿にみえるやり方だが、そうすることで不快感をそれとなく書き手に伝え、手紙の書き直しを促すのである。返事を書状でなく、口頭でおこなうという手もあった。これは「用事自体はすませることができし、知らん顔をしているよりは角立たずに不満の意思が表現できる」という点では、たしかに妙案であったかもしれない。

このような書札礼違反への抗議は、かならずしも格上の者から格下の者にたいしてだけおこなわれたわけではないことにも注意しなければならない。たとえ格上の者から送られてきた手紙であろうとも、不適切な書札礼が用いられていれば、決して泣き寝入りすることなく、憤然と書き直しを求めのが中世人の矜持きやうじというものであった。そしてこの書札礼も、「弘安礼節」を墨守していればよいというわけではなく、状況に応じてさまざまな微調整が加えられ、さらにそれが「先例」化することで時代に適合した新たな書札礼が生み出されてゆくのである。

中世において書状と贈り物とは切っても切れない関係にあった。A、近世でもそうだが、正式な贈り物は、これを持参するばあいには目録（折紙）、送付するばあいには書状を添付することが原則とされていたからである。当時は目録や書状が添えられていない贈り物は内輪の贈り物か、下位者への贈り物にかぎられていたから、正式な贈り物であるにもかかわらずこれらの添付を怠れば、無礼な贈り物とみなされた。B 書札礼違反の書状が届いたときと同様、贈り物

だけが単独で贈られてきたばあいにも受け取らずに送り返したり、受け取っても返礼をしなかったりといった対応がしばしばとられたのである。これらの相似形は、手紙が贈り物と同じ原理によつて動いていることのよい証拠だろう。贈り物と手紙にはまったく同じ礼節のコードが埋めこまれているのである。

C 贈り物と書状をめぐるトラブルといえは、その手の記事に事欠かないのが本願寺証如の日記『天文日記』である。一五三五年(天文四)十一月に証如は細川晴元ら、それまで対立していた諸武将と和議を結んだが、そのとき河内国守護代の遊佐長教にも和議の礼として馬と太刀を贈った。遊佐からは翌年正月、太刀一腰と馬一疋に書状を添えた返礼が贈られてきて、証如は使者とも対面をはたしている。証如と遊佐のあいだにはその後も何度か贈り物や書状のやりとりがあったが、一五三七年(天文六)三月になつて本願寺(注5)一家衆の興正寺のもとから「遊佐は、天文四年に証如が和議の礼を贈つたさい、証如の書状が添えられていなかったことに立腹している」との情報がもたらされて証如をあわてさせている。この事例は、書状という一見些細にみえる小道具が、贈答においていかに重要な要素であつたかを端的に示している。

贈り物に添えられる書状には贈与の事由や贈り物の品目・数量などが記されていて、目録と同じ役割をはたしていた。そして、実際に贈られた品物が書状に記された品目・数量と一致しないときにも、中世人は受け取りを拒否したのである。一五五三年(天文二二)十二月に能登の畠山徳祐(義統)から(注6)香合・盆一枚・虎皮が贈られてきたさいには、このうら虎皮のことが書状に漏れていたために証如は虎皮だけ受け取らなかつた。**D** 翌年、畠山が再度書状を添えて虎皮を贈りなすと、証如も納得してこれを受け取っている。

このような中世人たちの「こだわり」を理解するためには、これも現代人にはややわかりにくい次の作法とあわせて考えてみるのがよさそうである。たとえば世話になつたお礼と年始の挨拶を兼ねて贈り物をするなどということは、今日では許容の範囲だろうが、当時にあつては一つの贈り物が二つの事由を兼ねる」ということは基本的にありえないことであつて、一つの贈り物はかならず一つの事由と対応していなければならなかつた。だから、同一の相手に同日付けで発送

するばあいにも、発送した贈り物のうちどれがお礼の品であり、どれが年始の品かを明確にし、しかもそれぞれの事由を二通の書状に書き分けて送らねばならなかったのである。

これらの作法には、^イすべての物事を数量化して考える中世人の思考様式がよくあらわれているように思われる。年始の進物が夏に届くこともめずらしくなかったように、中世とは、一年中さまざまな事由の贈答品がかなりのタイムラグをとまなびながら飛び交っていた時代である。そのような時代に交際を円滑に続けるためには、今日届いたこの贈り物の事由がいつどこで発生したのか、そしてその品目はどのようなもので、数量はどのくらいあったのか、さらにはそれを持参したのが本人であったか、使者であったか、使者のばあいにはどの程度の身分の者をよこしたか等々の情報を正確に記録しておくことが不可欠であった。それらの記録は、そのまま返礼をおこなうさいの基準となる。ここに自分と相手との身分差を加味したうえで、返礼の品目と数量、派遣する使者の身分、返礼する時期——すぐに返礼するか、一定の日数をおいてから返礼するか——等々を決定したのである。そのような思考様式のもとでは、一つの贈り物が二つの事由を兼ねるゝなどということはとうていありえない話であった。

もうひとつ、これはさきの遊佐長教の事例にかかわることだが、不満の表明が原因発生から一年以上もたつて突然なされていくことにも注目したい。証如が原因をつくつたのは一五三五年(天文四)十一月であったにもかかわらず、遊佐から不満の表明がなされたのは一五三七年三月と、じつに一年半近くもたつてからのことであった。しかもその間、何食わぬ顔で贈答や書状のやりとりが続いていたというのも現代人には信じがたいところだろう。

そのような執念深さと二面性を、中世の人びとはたしかにもっていた。彼らの帳簿の付け方はきわめて厳格であり、たとえ些細な「不足」であろうとも、それが回収されないかぎりは何年でも貸し勘定として繰り越されていった。目をつぶるとか、水に流すといった選択肢はそこにはない。彼らは何年ものあいだこの「不足」の存在を忘れず、回収の機会をじつと待ちつづけることができたのである。

だが一方では、その間に平然と贈答や書状のやりとりがおこなわれていたことや、原因が解消されればすぐさま良好

な関係が回復していることからもうかがえるように、彼らの不満がかならずしも相手の人格そのものの否定には向かわなかつたことにも注意する必要がある。現代人であれば、一度このようなトラブルのあつた相手とは、「あんなやつとはもう付き合わない」と絶交してしまいかねないところだろうが、中世人はそうではなかつたのである。^(注7) ルース・ベネディクトの表現を借りれば、「彼ら（＝日本人）はアメリカ人のように、ある人を不正であると言つて非難する代りに、その人間がなすべき務めを完全に果たさなかつた行動の世界を明らかに示す。ある人を利己的であると不親切であるとか言つて非難する代りに、日本人はその人間が掟に違反した特定の領域を明示する」（『菊と刀』）というのが彼らの典型的な行動様式であり、よくいえば、X が彼らの流儀であつた。

ただし、このように批判がかならずしも人格の査定に直結しなかつたということ（批判の非人格性）は、逆に相手の行為を評価するばあいにも、その評価は人格まで到達しにくかつたということ（評価の非人格性）を意味してもいる。もちろん中世にも「懇志」という言葉があつたように、心のこもつた贈り物というものがまったく存在しなかつたわけではないが、より多くのばあい、贈与は定型化、ルーティン化した行動様式として存在していたにすぎないようにみえる。かりに心のこもつた贈り物がなされたとしても、その心まで評価されることが少ないとしたら、そもそも心のこもつた贈り物をしようという動機が育つだろうか。

定型化、ルーティン化した行動様式とは、要するに反応であり、反射である。基本的ないくつかの項目が入力されさえすれば、そこから自動的に品目・数量が割り出され、出力されてくるという機械的な一面が、中世の贈与にはまちがいないくあつた。中世の贈与がもつていたこのような非人格性ゆえに、このシステムはまもなく経済的な手段としても利用されてゆくことになる。

（桜井英治著『贈与の歴史学』に基づく。ただし、出題に際し省略などの改変をしている。）

（注） 1 亀山院政……亀山天皇（一二四九—一三〇五）は讓位後も上皇として政治の実権を握つた。

- 2 殿上人……宮中において昇殿を許され、天皇の近くで仕える者。
- 3 地下……宮中において昇殿を認められていない者。
- 4 撰関家……天皇に代わって政務を執る撰政・関白に任じられる家柄。
- 5 一家衆……浄土真宗で、本願寺法王と同じ家系の一族。
- 6 香合……香を入れておく容器。
- 7 ルース・ベネディクト……一八八七—一九四八。アメリカの文化人類学者であり、日本人と日本文化について研究を行って

いた。著書に『菊と刀』がある。

問一

傍線部ア「『弘安礼節』は書札礼・路頭礼・院中礼の三部よりなる」とあるが、書札礼に関する説明として不適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、ア。

- ① 書札礼は、交際のある人びとについて格付けや序列化が行われていた中世において、官位や権勢などの情報を敏感に反映していた。
- ② 書札礼は、貴族以外の人びとには縁が薄かった路頭礼や院中礼とは異なり、手紙を書く人びとの間で広く参照され、応用された。
- ③ 実際の書札礼は、かならずしも「弘安礼節」どおりに行われていたわけではないが、官位に関してはきわめて厳格に運用された。
- ④ 書札礼に違反する行為に対しては、手紙の受け取りを拒否するなど、相手にそれとなく不快感を伝えるようなやり方で不満を示すこともあった。

問二 空欄 A 〱 D に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①〱④の中から一つ選べ。

解答欄は、イ。

①	A	というのも	B	だから	C	ところで	D	けれども
②	A	しかし	B	そのため	C	そこで	D	しかし
③	A	ところが	B	そして	C	また	D	とはいえ
④	A	なぜなら	B	したがって	C	いわゆる	D	つまり

問三 傍線部イ「すべての物事を数量化して考える中世人の思考様式」の説明として最も適切なものを、次の①〱④の中から一つ選べ。解答欄は、ウ。

- ① さまざまな事由の贈答品が不定期に交換されていた中世において、一つの贈り物が二つの事由を兼ねることは、相手が情報を正確に記録する負担を大きくするため敬遠されていたということ。
- ② 贈り物と贈り物に添えられた書状に記された品目や数量とが異なる場合でも、受け取りを拒否せず、態度を変えるべきではないという考え方。
- ③ 事由の異なる贈り物を一つの贈り物で済ませることは、相手との身分の違いを暗に示すことになるため、かならず事由ごとに分けて贈る必要があるという考え方。
- ④ 贈り物の事由と時期、品目と数量、使者の身分、贈り手と受け手の身分差等の要素を基準に、返礼の内容、時期、方法を決めるという考え方。

問四 空欄 に入る言葉として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、。

- ① 罪を憎んで人を憎まず
- ② 賞は厚くし罰は薄くすべし
- ③ 罪なくして配所の月を見る
- ④ 天を怨み^{うら}みず人を咎^{とが}めず

問五 傍線部ウ「批判がかならずしも人格の査定に直結しなかったということ（批判の非人格性）は、逆に相手の行為を評価するばあいにも、その評価は人格まで到達しにくかったということ（評価の非人格性）を意味してもいる」とはどのようなことか。その説明として不適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、。

- ① 贈り物の作法違反も贈り物の気遣いも人格と結び付けて考えられることはなく、贈与という行動様式がきわめて機械的に計算されがちなものであったということ。
- ② 心のこもった贈り物に対しては、あえて自動的に品目・数量などが算出される定型的な反応をするようにしていたということ。
- ③ 贈り物の内容や書状に「不足」があれば、その回収まで貸し勘定はくり越されたが、ひとたび原因が解消されれば、良好な関係が回復されたということ。
- ④ 贈り物やその返礼をするさいに、心のこもったやりとりがなされることはあまりなく、定型化、ルーティン化された行動様式として存在していたということ。

問六 本文の内容と合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。順序は問わない。解答欄は、

カ

・

キ

。

① きわめて体系的で整備された内容をもった「弘安礼節」において、貴族の間でのみ参照され、応用可能な汎用性を備えていたのが書札礼であった。

② 中世の贈与は、さまざまな要素を勘案しながら数量化するという機械的な処理がなされており、その非人格性を特徴としていた。

③ 中世において贈り物をする際に書状は不可欠であったため、両者の内容が一致しない場合には受け取りを拒否するなど、非合理的な中世人のこだわりが示された。

④ 中世の贈与においては、官職をベースとした「弘安礼節」の礼法に厳格にしたがい贈答儀礼がおこなわれた結果、定型化、ルーティン化した行動様式が定着していった。

⑤ 中世において、正式な贈り物には目録または書状の添付が不可欠であったが、下位者への贈り物にはそれを添付しないこともあった。

⑥ 中世人は、書札礼に対する違反行為に対して受領や返礼をしないことで不快感を示したが、その際上位者から下位者に対してのみ抗議が可能であった。

第3問 次の各問（問一～問八）について、それぞれの指示に従って答えよ。

問一 次のA～Dの各群において、傍線部の漢字が適切なものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A ア ・ B イ ・ C ウ ・ D エ 。

- A
- ① 表現に工夫を懲らす。
  - ② 釣った魚をすぐに川に離した。
  - ③ 差し障りのない話をする。
  - ④ 盛大な結婚式を揚げた。

- B
- ① 試合で実力を発輝した。
  - ② 人跡未倒の密林に潜む。
  - ③ 経済の専門家を養成する。
  - ④ 法外な代金を請求された。

- C
- ① 激薬なので取り扱いに注意が必要だ。
  - ② 事件の渦中に巻き込まれる。
  - ③ 紛飾決算を行った企業が倒産した。
  - ④ 作品の出来栄えに大いに関心する。

- D
- ① 最終戦で優秀の美を飾った。
  - ② 祖父の病状は余談を許さない。
  - ③ 刻銘な記録を証拠として残している。
  - ④ 彼女は誰にでも弁舌をふるう。

問二 次のA～Dの各群において、漢字の読み方（カタカナ表記）が不適切なものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A ・ B ・ C ・ D .

A
④ ③ ② ①
玄人（クロウト）
芝生（シバフ）
時雨（サミダレ）
為替（カワセ）

B
④ ③ ② ①
惜別（セキベツ）
添削（テンサク）
逐次（チクジ）
債務（セキム）

C
④ ③ ② ①
恭（ウヤウヤ）しい
唆（ソソノカ）す
廃（スタ）れる
狭（ハバ）む

D
④ ③ ② ①
喚問（キツモン）
市井（シセイ）
弔電（チヨウデン）
廉売（レンバイ）

問三 次のA群とB群において、傍線部の漢字の読み方が同じ組み合わせはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A ・ B .

A
④ ③ ② ①
右折 | 引率 | 会釈 | 直訴 |
| | | |
座右 | 比率 | 会得 | 当直 |

B
④ ③ ② ①
治水 | 見聞 | 布施 | 險悪 |
| | | |
自治 | 聴聞 | 実施 | 嫌悪 |

問四 次のA群とB群において、類義語の組み合わせとして不適切なものはどれか。それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A サ・B シ。

A			
④	③	②	①
不朽	弁明	敢行	煩雑
	釈明	断行	粗雑
			不滅

B			
④	③	②	①
交渉	哀惜	深慮	沿革
	悲壮	熟考	変遷
			談判

問五 次のA～Cの各群において、傍線部の語が最も適切に使われているものを、それぞれ①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、A ス・B セ・C ソ。

A			
④	③	②	①
		鎌をかけて白状させる。	鎌をかけて喜ばせる。
		鎌をかけて間に合わせる。	鎌をかけて働きに行かせる。

B			
④	③	②	①
		忌憚 きたん のないことがばりしていると人間が横着になりますよ。	忌憚 きたん のない世界に飛び出しましょう。
		忌憚 きたん のないがっしりした体つきですね。	忌憚 きたん のないご意見をお願いいたします。

C			
④	③	②	①
		彼女は満を持して自分の会社を立ち上げた。	思いがけない昇進の知らせに満を持した。
		インフレ率が三千パーセントとは、満を持する数値だ。	
			よい結果に満を持することなく、精進していくつもりだ。

問六 次のA群とB群の傍線部の語が、例文の傍線部の語と同じ使われ方をしているものを、それぞれ①～④の中から一

つ選べ。解答欄は、A タ・B チ。

例文 会長はまもなくおいでになるそうだ。

- A
- ① 今度の仕事はあまり簡単ではなさそうだ。
  - ② これからも厄介なことが続きそうだ。
  - ③ 病気はすっかりよくなつたそうだ。
  - ④ もうすぐ雨が降りそうだ。

例文 このキノコは毒があるので食べられない。

- B
- ① 街で知らない人に声をかけられた。
  - ② 講師の先生が会場に来られた。
  - ③ 母の手を借りずに一人で着物が着られた。
  - ④ 外出先で雨に降られた。

問七 次のA～Dの意味を持つ慣用句を、それぞれ①～④の中から一つ選べ。解答欄は、A ・ B ・

C ト ・ D ナ。

A おかしくてたまらない

- ① 眉をひそめる
- ② へそで茶をわかす
- ③ 鼻であしらう
- ④ へそを曲げる

B 偽り隠していたことが表に出る

- ① 袋のねずみ
- ② 猫をかぶる
- ③ 馬脚をあらわす
- ④ 犬の遠吠えとおほ

C 取り扱いに困る

- ① 手を焼く
- ② 手を染める
- ③ 手を切る
- ④ 手をこまぬく

D ひどく不愛想にあしらう

- ① 二枚舌を使う
- ② 木で鼻をくくる
- ③ 針のむしろ
- ④ 気が置けない

問八 次のA～Dにおいて、空欄に最もよく当てはまることわざを、それぞれ①～⑧の中から一つ選べ。ただし、同じも

のを繰り返し使用してはならない。解答欄は、A ・B ・C ・D .

A 彼は簿記検定試験一級を取得しているのに、それをまったくひけらかさない。だね。

B キャンプが終わったら、使った場所をきれいに片づけて帰らなくてはいけないよ。だ。

C できることはすべてした。結果が出るのは一週間後だが、の心境だ。

D いつも元気な弟だが、父にこっぴどく叱られてのように元気がなくなってしまった。

- ① 魚心あれば水心
- ② 青菜に塩
- ③ 立つ鳥跡を濁さず
- ④ 大山鳴動してねずみ一匹
- ⑤ 人事を尽くして天命を待つ
- ⑥ 能ある鷹は爪を隠す
- ⑦ 住めば都
- ⑧ 立て板に水

〔国語の問題は以上です〕